

『古代アメリカ』4, 2001, pp. 103-110

<書評>

Mummies and Mortuary Monuments: A Postprocessual Prehistory of Central Andean Social Organization. William H. Isbell. University of Texas Press, Austin, 1997. xvii + 371pp. \$40.00(cloth).

渡部森哉 (東京大学大学院)

本書の著者ウィリアム・イズベルは1943年生まれの文化人類学・考古学者で、現在アメリカのニューヨーク州立大学教授である。アンデス先史学の分野ではワリ・ティワナク文化研究者として知られ、ハルガンパタ遺跡 (1969)、ワリ遺跡 (1973-1981)、ホンコパンパ遺跡 (1987)、ポリビアのイワウイ遺跡 (1993)、コンチョパタ遺跡 (1999-) と数多くの遺跡発掘を手がけている。

彼は2つの関心が結びつき本書のテーマとなったという。一つはアンデス文化という概念とそれを先史時代に応用する方法について、そしてもう一つは埋葬建築に関してである。こうした関心は1964年にシユスタニ遺跡の埋葬建築を訪ね、1967年にアヤクーチョのチユスチで、著名な文化人類学者で彼の最初の妻、ピリー・ジーン・イズベルと民族調査を行った頃に始まっているため、ワリ・ティワナク研究よりも古くから興味を抱いていたことになる。

本書でイズベルは、アンデス的とされてきた特徴のうち社会集団としての「アイユ」(定義については後述)を取りあげ、それを埋葬建築と結びつけ議論を展開し、アンデスの歴史をとらえる新たな枠組みを提示する。以下章を追って内容を紹介するが、できるだけ本書の記述に沿って要約することにし、評者のコメントは最後に載せることにする。

第1章：過去を知ること

著者イズベルはアンデス先史研究における「プロセス考古学の文化進化論に基づく、現在普及している語りが不適切である」(p.1)と述べ、アンデス先史研究の新しい枠組みを提示することが本書の目的であるという。その題材としてアイユを取り上げ、その起源、歴史、性格を追求する。アイユとは、アンデスにおける祖先を共有する血縁的集団、と概ね考えられているが、その性格については本書の中で再検討されている。

こうした挑戦的な問題提起の槍玉にあげられているのは、かのマイケル・モズリーの著作『インカとその祖先たち』[Moseley 1992]である。モズリーはその著作の中で、アイユの起源は数千年前に遡ると記述しているが、それに対しイズベルはその年代をもっと新しく紀元後に設定する。こうした背景には考古学データを解釈する両者の枠組みの違い、即ち、プロセス考古学の立場に立つモズリーとポスト・プロセス考古学の立場に立つイズベルが対峙する構造があるという。

また、著者が埋葬建築に興味を持ち始めた経緯に触れられている。1964年にはじめてチュルパ(地上墓)を見て以来、こうした建築はワリ遺跡の巨石石室に起源があると考えていた。しかし、この仮説を放棄せざるを得なくなったのは、1991年にペルー北高地チョタ、クテルボ地方でチュル

パを目にしてからである。チュルパの石の浅浮き彫りのレリーフをみて、前期中間期後期 (A.D. 200-500) に時期比定をするようになったことを告白する。その後植民地期の史料にあたりミイラ、祖先崇拜について調査し次のように確信したという。アイユの歴史は祖先のミイラの歴史であり、祖先のミイラの歴史はチュルパ、及びそれに類似した祖先の遺体を安置する建築の歴史であると。

第2章：クスコのインカ王のミイラ

イズベルはアイユとはなにかという問題に対し、現代の民族誌をひとまずおき、古い文書に依拠し、議論を進める。それは16世紀のクスコ、そして17世紀のワロチリ地方に関する記述である。

インカ王に属する集団たるアイユは「パナカ」と呼ばれる。この章ではそのパナカの成員がインカ王のミイラをどのように扱い、また彼らにとってミイラがいかなる意味を担っていたかが検討される。

ペドロ・ピサロなど征服者の記録、ワマン・ボマの著作、また、コボ神父の『インカの宗教』からミイラについての記述を抜粋し紹介する。そしてまた、ポロ・デ・オンデガルドがインカ王のミイラを追跡し、発見した経緯に触れる。そうした記述を積み重ね、インカ王のミイラが死後その所属するパナカによって保管され、決して埋められず、彼らにとって集団の創始者としての役割を付与されていたと主張する。

また、ジョン・ロウの単系王朝説とザイデマの双分王朝説を検討し、いずれの場合でもミイラは王朝の正当化に必要な創始者として重要な役割を担っていたことには変わらないことを強調する。

第3章：ワロチリにおける祖先のミイラ

ここでは、アピラが編集したとされる有名なワロチリ文書の分析から、そのなかでアイユがどのように描かれているかを検討する。

17世紀初頭に編纂されたとされるワロチリ文書のなかでは、アイユは一枚岩ではなく、いくつかのサブグループに分かれている場合もあり、それぞれが祖先を抱いていた。アイユは分断したり、統合したりと非常に流動的であり、また系譜が明確にされないという (p.90)。つまりそれぞれのアイユの関係、権利は曖昧であり、それは現存するアイユの構成員によって交渉される、つまり現実に合わせて再形成されるものだという (p.93)。

アイユの定義は時代に合わせてなされるべきであると主張し、イズベルはスペイン人による征服直後の16世紀初頭に時代を設定して定義する。「アイユとは、創始者あるいは祖先に属する資源を共有する集団であり、そして創始者が共通祖先とされる場合、その構成員は親族名称によって分類される」 (pp.98-99)。アイユでは4つの要素—社会集団、共有資源、親族名称による序列、創始者(祖先)—が本質的である。そして第4番目の要素「創始者、祖先」こそが考古学的データに基づきアイユの起源を探る鍵となる。

第4章：アイユの起源に関し対立する理論

イズベルは、プロセス考古学の文化進化論に基づくアンデス先史のモデルを批判対象として取りあげる (pp.120-123)。それは次のようなシナリオである。

古くは等価労働交換 (アイニ) によって結ばれた集団アイユがあり、その後非等価交換 (ミン

カ、あるいは再分配)によって成り立つアイユの集団、即ち一部の首長、王が富を保有するエスニックグループ(王国)が出現し、最後にインカに統合される。つまり時代に沿って次第に集団が大きくなっていったというモデルである。そして、多様な環境の利用が、家族レベルを超えた集団、即ちアイユが形成された原因であるという。例えばモズリーは、すでに6000年前にアイユ的な集団が認められ、紀元前2000年期はじめにはアイユのような集団が公共建造物を建て始めたとしている。

イズベルは、こうした理論には二つの問題がつきまとうと批判する。一つは観察される事象を近代のものや伝統のものに分け、それを時系列上に並べるという方法、もう一つはアンデスの普遍的な伝統を設定し、それを過去に投影するという問題である。そしてインカ期以前の時代、アイユがきわめて雑多であった可能性にふれながら(p.128)、また、現代認められる均質なアイユ共同体が植民地期の変容を経てできあがったことを指摘し、そうしたアイユ共同体が古くから変わらずに存在してきたという前提の妥当性を問題にする。

著者は、アイニやミンカが先スペイン期のアイユの労働コントロールを規定していた証拠はなく、それらは貨幣経済への編入期にできあがった、世帯間で労働供給をする制度として理解されるべきだと述べる(pp.132-133)。また、アイユは、階級や階級の特権に基づいた国家社会への抵抗として出現したという(p.134)。そして、祖先崇拜がミイラを安置する地上墓(チュルパ)と密接に結びついており、それがアイユの起源を探る鍵となると主張する。

第5章：地上墓(開かれた墓)

イズベルは祖先崇拜を考古学的に追求するための墓の認定基準を設け、まず墓を大きく地上墓(Open Sepulcher)と地下墓(Huaca Cemetery)に分ける。前者は崇拜のためミイラに対し恒常的なアクセスがあることが条件であるとし、一方後者は遺体は埋められたらその後墓は決して開けられない。

また、実際の建築については、東向きの出入口、小窓、ニッチの存在など様々な要素が抽出できるが、どれか一つが絶対的な条件ではなく総合的に判断されるべきであるとする。またミイラ、人骨の存在は必ずしも必要ではないという。

第6章：地上墓の分布

ここではチュルパ(地上墓)の存在する遺跡を紹介するが、議論はアンデス高地に限定される。海岸では乾燥しており保存条件が良く、特別な墓を作らなくても遺体が保存できた可能性があるため、海岸には別の調査が必要だという。

ティティカカ湖周辺からはじまり、クスコ、アレキーパ地方、アヤクーチョ地方、ワンカベリカ、ハウハ、フニン、ワロチリ、カイエホン・デ・ワイラス、ワマチューコ、カハマルカ、と北上して進む。後で分かることであるが、これはイズベルが考える新しい方から古い方という順序に対応する。また、現在チュルパが多く確認できるアンデス中央高地周辺(カイエホン・デ・ワイラスとアヤクーチョの間)は現地調査しておらず、文献から紹介しているのみである。

第7章：チョタ、クテルボの地上墓

イズベルが最古の地上墓があると考えるペルー北高地チョタ、クテルボ地方のチュルパ(地上

墓)を詳細に検討する。チュルパの石彫の図像が、モチェ、レクワイの土器の図像と類似していることから、クテルボのチュルパを前期中間期後期(A.D.200-500)に比定する。検討した中では最古となり、チュルパの起源をここに置く。

第8章：アイユの起源と先史アンデス

最終章で、これまでの議論をふまえ、新しいアンデス先史のモデルを提示する。

イズベルは、「本研究の最も重要な発見は、アンデスの文化展開において、地上墓とそれに関連するアイユ組織は、国家に先行するものではないということである。むしろそれらは、集中的な国家形成過程がすでにペルー北高地の多くの人々の生活に影響を及ぼしていた時に発展したようだ。」(p.290)、とアイユの起源を国家形成と平行する過程として論じる。つまり、前期中間期にモチェという国家が北海岸で興りつつあった時、北高地ではアイユに基づいた別の社会形態が生じたという。その後、アイユは中期ホライズン期に南に広がり、ワリヤティワナクの崩壊の原因ともなったと述べる(p.298)。つまり、これまで崩壊といわれてきた現象は、実は国家社会からアイユへの移行だという可能性を指摘する。そして、後期中間期には南高地、ボリビア高地で広まりをみせ、インカ期につながるという。

インカ帝国については次のように述べる。アイユの成員にとって、資源は生きている人々ではなく、死んだ祖先により所有されるのであるが、インカ王だけは生きながらそれを所有できた(p.292)、という。またイズベルによれば、アイユはインカ国家に参加したが、インカ王は各アイユの祖先ミイラの立場を保証した。そして、インカ帝国はインカ王自身が生きながら祖先となることで“超アイユ”となったのだ(p.302)という。

著者は再びプロセス考古学の問題点(民族誌を用いた類推、文化進化論、モデルの考古学的検証の不足)を指摘し、今後の研究の具体例として、これまでアンデスの特徴とされてきた、垂直的環境の相補性(vertical ecological complementarity)と国家における労働税(state taxation in labor)を挙げ、本書を結んでいる。

本書の価値は、アンデス先史研究における文化進化論的な枠組みの前提を問題にし、新たな研究方法、新しい議論の仕方を模索したことにある。従来、インカや現在の民族誌をモデルに過去を記述する方法が多く、その問題点もささやかれてきたが、これを正面を切って批判し、その代替となるモデルを構築したイズベルの姿勢、問題提起は評価されるべきであろう。

これまでアンデス社会の基本形態、核となる統合原理と見なされてきたアイユという集団をテーマとして取りあげ、それを祖先崇拜、ミイラ崇拜と結びつけ、チュルパという遺構として認定できる基準に注目することで、考古学的に議論できるというイズベルの主張は非常にユニークである。アイユという集団を状況証拠からのみ論じてきた研究に対し、チュルパという物的証拠を提示したことは、新たな議論の手がかりとなっている。従来、墓のデータについては限られた範囲での記述に偏っていたが、それを単なる埋葬形態の話ではなく、社会形態を探る鍵とみなすことは斬新な視点である。確かに、モチェ、シカンなど遺体を地下に埋めて遺体に永久にアクセスすることは想定されない埋葬と、遺体をミイラとして出し入れする墓の間には質的な違いが認められる。ただそれが国家とアイユという枠組みに置換されるかどうかは別問題であるが、今後新たな展開が期待できるテーマである。

一方で、本書には気になる点がいくつかあるため、それについてコメントしたい。

[プロセス考古学・文化進化論への批判について]

これまで考古学者は、社会が大規模化し複雑化するプロセスを問題とし、家族レベルを超える規模の社会がでてくるのがいつごろか、あるいは地域統合がどのように進んでいったかを議論してきた。旧大陸においては新石器革命、アーバニゼーション、国家の登場などその段階を説明する枠組みが提示されてきた。アンデスにおいても国家レベルに達した社会がいくつも興亡したとされるが、そうした社会形態が突然現れることはなく、その前の時期にはどういった社会があり、どのような道のりを経てきたのかが問題であった。いくつかの段階を設けて、それぞれを個別に説明するのは便利である。そしてその一部の段階、家族レベルを超える集団を想定する場合にアイユという概念を用いる考古学者もいる。確かにイズベルがいうように、アイユという概念は地域・時代により非常に多様性を見せるため、現代あるいは植民地期のデータを、基準を示さないまま直接先史時代に应用するのは軽率であろう。だが、アイユとは何かではなく、あくまでアンデス先史の展開の過程が議論の対象であったため、アイユという概念ではなくほかの単語を用いても、議論の大枠は変わらないのである。

イズベルの指摘の重要な点はアイユという集団が普遍であるという前提の妥当性を問題にしたことであった。確かにある特徴が認められる場合、それは過去にその起源を持ち、また時間が進行するにつれて変化する。しかしながら彼自身16、17世紀の史料を用いアイユのモデルを提示し、それをあたかも変わらずにあったかのように無批判に先スペイン期に援用している点で、自らが批判する問題点を内包している。

[モーズリー批判について]

イズベルは至る所でモーズリーの著書を批判している。具体的に、122ページにて取りあげた部分を原著に沿って見てみよう。

まず、モーズリーは紀元前5000年頃とされるチリ北海岸のチンチョーロ文化、紀元前6000年頃のペルー中央海岸のラ・パロマ遺跡のミイラにふれ次のように述べている。

「アイユからインカ国家まで、アンデスの社会形成は実体的な共通祖先の崇拝に基づく血縁のつながりにより結合し、ミイラは創始者と集合的アイデンティティーの優先的象徴であった。」

[Moseley 1992: 94]

イズベルはこの記述に基づき、モーズリーが紀元前数千年前にアイユの起源があると述べていると批判し、アイユの起源を紀元後200-500年頃とする自分のモデルと対置させている。しかしイズベルが主張しているのは、考古学的な根拠を示さずにアイユについて語るのは不当であるということであったはずである。慎重にモーズリーの本を読めば、ここでミイラ製作、祖先崇拝を根拠に「アイユ的」な集団の出現を示唆していることは明らかである。また他の箇所でもモーズリーはアイユについて述べているが[ibid.: 49-65]、イズベルの定義と多少差異はあるものの、祖先崇拝が基本であることはイズベルの立場と変わらないのである。イズベル自身、はじめに地上墓と地下墓を分けて、祖先崇拝にはミイラへのアクセスがあったかどうかの問題であるとし、海岸砂漠での遺体の保存は、地上墓であるかどうかにはよらないため、異なった研究が必要であると述べている (pp.35、159) にもかかわらず、モーズリーの記述の年代の部分だけを取り出し、批判をしているのは理解で

きない。アンデス高地に議論を限定しているイズベルと、海岸のデータで議論しているモーズリーとは、データベース自体が異なるため年代が違うのである。

また、モーズリーは紀元前2000年頃の農業組織についての下りで次のように記している。

「草創期の農業共同体は、スペイン人が海岸で目にしたアイユ的組織の祖型でないにしても似たようなものであったと想定することは、証明できないにしても無理のないことである。」[Moseley 1992: 127]

ここでモーズリーは植民地期に海岸に存在した社会組織を指すのに賢明にも「アイユ的」という表現を用いたと思われる。というのは、アイユという概念は主にアンデス高地のデータに基づいた概念であり、海岸においてはこうした高地でみられるようなアイユがあったのかどうか不明であるし、その概念を適応するのが妥当かどうかとも怪しいからである。つまりモーズリーは明らかに海岸の集団と高地のアイユとの間に違いがある可能性を認め、植民地期の「アイユ的」集団とし、草創期の社会集団をその「祖型ではないにしても似たようなもの」と賢明にも断定を避けている。イズベルはこれを誤解し、モーズリーがあたかも草創期にアイユの集団がいると述べている、という論調で批判してしまったのではないだろうか。

こうした不当な批判の対象とされたモーズリーからは、原著からの引用を許可されなかった(p.34) そうだが、本書の内容をみればそれは大いに納得できるのである。イズベルは海岸においては違った研究が必要だと述べていながら、海岸のデータで議論していたモーズリーを批判し、自己矛盾に陥っているのである。

[国家とアイユの関係について]

イズベルは石彫のモチーフというたった一点の根拠から、チョタ、クテルボ地方のチュルパが最古とし、そこからアイユを、時期的に平行するモチェという国家の出現に対する別の社会と考える。しかし、クテルボ地方のチュルパが最古であるかどうかはまだよく分からないため、同時性が崩れればイズベルのモデルは成り立たない。そもそもイズベルが海岸のデータを使用せずに議論していることを忘れてはならない。また、アイユを国家に抗する形で発展した集団とするならば、インカは国家ではないということになる。なぜならアイユの根本的な特徴である祖先崇拜はインカ王の事例から敷衍したものであるからである。にもかかわらず「国家」「帝国」「超アイユ」など(p.302) と様々な用語でインカを記述する姿勢は理解できない。

さらに、それでは一体国家の成員たる人々はいったいどのような集団なのか、という疑問が生じる。国家は階級に基づいた社会といているが、階級とアイユは両立不可能なのか。国家には祖先崇拜はあってはいけないものなのであろうか。アイユと国家は相反する存在なのだろうか。

他にも、第4章におけるアイニ、ミンカに関する解釈など不明な点が多いが、興味ある方は実際に本書を読み、検討していただきたい。新しいモデルには活発な批判が寄せられることが多々あるが、本書に関する反応はあまり聞かれない。唯一デイビッド・ブラウマンによる厳しい書評[Browman 1998]が寄せられているので参照されたい。

参考文献

Browman, D. L.

- 1998 Review "Mummies and Mortuary Monuments: A Postprocessual Prehistory of Central Andean Social Organization (WILLIAM H. ISBELL)". *Latin American Antiquity* 9 (2) : 186-188.

Moseley, M. E.

- 1992 *The Incas and Their Ancestors: The Archaeology of Peru*. Thames and Hudson, London.

